報　　告

インドネシア管見記（1）

富山県農村医学研究会　長谷田　祐作

出発まで

「農村における医療の現状と課題」をテーマとして第1回学術交流会がインドネシアはスラウエジ島（旧セレベス島）のハサヌディン大学医学部と富山県農村医学研究会との間で実施されたのは昭和63年7月下旬である。この話は昭和63年度の第1回理事会で会長から紹介され希望者を募るということであったが，その後，急速に話が進展して6月下旬に演題の順序，内容なども固まり7月24日に出発ということになっていた。

参加人員は10名で豊田夫妻，越山夫妻，長谷田夫妻，中川秀幸先生，寺中先生，それに金沢工大名誉教授の西岡先生とその娘さんで高校の英語教師，村田さんという顔振れであった。

話はかなり早くから決まって旅券などの手続きも終わったが出発などスケジュールについての詳細が旅行社から正式連絡がなくて一時無期延期になるのではと我われをハラハラさせたが最終的に決定した案内を見ると当初の予定は1日延びて7月25日に成田出発ということになった。これは暑中休暇の学校関係者と競合的な状態になり結局当初の予定が1日ずれてしまったということで学術交流会も先方の了解の下に1日延びることになってしまった。

乗る飛行機がガルーダ航空ということで初めて耳にする航空会社であるがインドネアの国営の会社という説明を聞いて先ずは一安心したというわけである。

24日には成田の日航ホテルで1泊ということに決まった。

旅行の日程

上記のように成田出発は7月25日，時間は午前11時，ガルーダ航空873便で行先はバリ島のデンパサール空港，到着予定時刻は20時，宿舎はバリ・ソルホテルで2泊，つまり到着当日は早く眠って翌日にバリ島の農村視察とバロンダンス観劇ということであった。27日にはデンパサール空港を7時5分に出発，ガルーダ航空700便によりスラウエジ島のウジュン・パンダン空港へ8時25分に到着，富山村視察を行う予定となっている。翌28日は終日ハサヌディン大学にて学術交流会を実施。この間の宿泊は2晩ともマカッサル・ゴールデンホテルに決められていた。

翌29日は午前中はウジュンパンダン市内視察，午後は2時にウジュンパンダン出発，ガルーダ航空25便によりジャワ島はソロ空港へ4時に到着，ジョグジャカルタ市（以下ジョグジャと略称する）へ向かい，ムチアラホテルで2泊の予定となっている。ジョグジャはソロ空港から約2時間を要するとされる。ソロはブンガワン・ソロ（ソロ川）でよく知られていると思う。

7月30日は午前はジョクジャ市内自由行動，午後は遺跡（ボロブドール寺院など）を訪問の予定。

31日の午前は自由行動，午後4時にジョグジャを出発，ガルーダ634便でデンパサールへ向かい同日午後9時同空港を出発，ガルーダ872便にて8月1日朝，成田到着。

以上が旅行日程の大要であった。

インドネシア国とは‥‥

インドネシアは正式にはインドネシア共和国であり建国の理念として５本の柱があるとされる。

国家元首は大統領で任期は５年が原則とのこと，現在スハルト大統領で２代目，初代はスカルノであることはよく知られている。スカルノ時代に隆盛を誇ったインドネシア共産党は現在非合法とされているようで現存する政党は３つといわれる。

国の総面積は191万９千平方kmで日本の約5.5倍東西５千kmで南北千９百km。そして１万３千の島々からなっている。日本は４つの島が基本となっているのと似ているが島の数は比較にならない数と言えるし，東西５千kmはアメリカ合衆国に匹敵しインドネシア国の自慢の１つともなっているようで「サバンからメラウケへ」という言葉で歌詞にもよく引用されているとのこと。サバンは西端でありメラウケは東端である。

第１図　インドネシア（黒ヌリ）周辺略図

第２図　スマトラ島など略図

小学校の義務教育制は今から５年前1984年に実施され６，３，３制が確立され，大学も今では殆どが４年制をとっている由。尤も地方では２部制をとっている小，中学校などもあり，また経済的理由で中途退学する子供もいるという。1986年の政府発表では文盲率は8.1％と10％を割ったとされる。

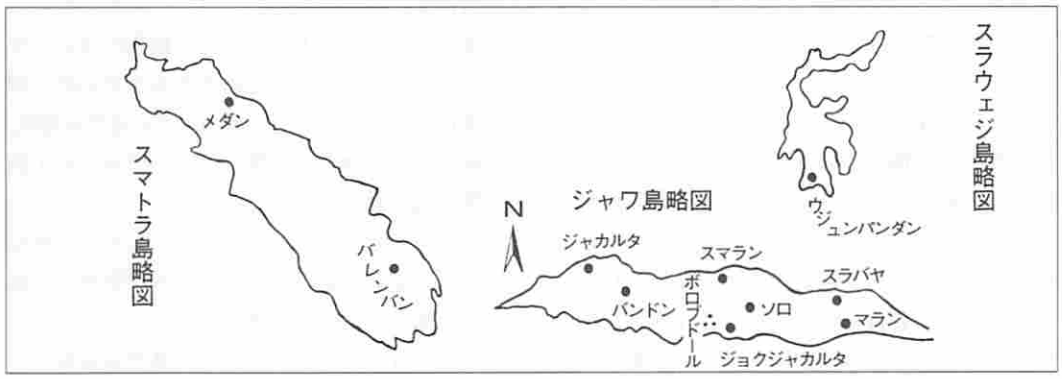
ハサヌディン大学の先生方のお話では国立大学が40～50校を算するとのことで，私立大学も多く，テレビを利用した放送大学も近年新設されて居り教育熱は高まっていることが察せられる。日本への留学生も年々増加している様子。

日本の海外技術援助当局の話では日本の海外技術援助の額から見ると第１位がインドネシアであり，開発の最も進んでいるのはジャワ島とのことである。

人口は首都ジャカルタで670万を算えるとのことで東ジャワのスラバヤでは200万，スマトラ北部のメダンは139万，西ジャワのバンドンで130万，中部ジャワのスマランでは100万，南スマトラのパレンバンは80万を数える（第２図スマトラ島，ジャワ島各略図を参照されたい）。

地方制度では，州→県→市→郡→町と自治体が細分化され「村」は正式の自治体名称とはされていないようだ。

日本の５倍を超す島々に居住する住民は単一民族ではなく300種族を算するとのことであり言語も多種多様，如何にして統合を計る



かが重要な課題であったと察せられるが前記5本の柱と言語の統一（バハサ・インドネシア＝インドネシア語）とによってインドネシアはこの課題を見事に克服したようだ。インドネシア語はマレー語が源でありインドネシアの青年層を中心として強力に推進されてきた様子であり，5本の柱とは1）絶対神への信仰　2）人道主義　3）インドネシアの統一　4）民主主義　5）社会正義で，憲法前文に建国の5原則として明らかにされているとのことである。

バリ島での印象

私たち豊田パーティは旅行社の案内，日程の通り成田空港を出発，25日の午後2時頃先ずはジャカルタ空港に到着した。時差の関係で現地時刻は2時間遅くなるが空港の建物はインドネシアの宮殿を模して建造されているとのことで豪勢な多角的なものであり一行はこの待合室で航空機の整備を待機していたが，窓外では何という木か熱帯性の数種類の樹木に珍しい花が咲き乱れ，見たこともない鳥が或いは枝にとまり或いは飛びかっていて，チョイとした極楽という感じ。

また近くに若い女性のグループが居て，聞いて見ると友人数名と叔母の店へアルバイトに行くのだとの話で，日本の女性も勇敢なもの(？)と感じ入った次第。

約2時間程の休憩後，再び機上の人となり予定通り目的地（デンパサール）へ着いた。もう日はどっぷりと暮れていたが荷物を受取り外へ出て間もなくマイクロバスが迎えに来てホテルへ向かった。

バリ・ソルホテルは空港とは対照的に不夜城の如く光り輝いていた。時刻的には午後9時に近い刻限であったが割合と人の出入りが盛んであり，休憩室に休んでいるお客も多く噂に聞いていたバリ風景の1つかなと思われた。　やがて各自の部屋に案内されたが1階の奥まった続き番号の部屋である。中庭には水路があり蓮の花みたいな水草が茂り疲れた心身を癒してくれた。私達はマラリアを気遣い，蚊に注意を払ったがその影は見当たらなかった。

このホテルは元来スペイン系の人の経営と聞いたが翌朝は7時にモーニング・コール，中庭の蓮の花を浮かべた池とヤシのコントラストが美しいのをユックリ鑑賞する暇もなく朝食，国際色豊かな朝の玄関口の混雑を後に私達は出発した。

農村視察の途次，霊泉のあるヒンズー教の寺院に参詣する機会があった。プール状の囲みの中，砂地を揺がせて水が静かに湧き出ていたが，横の境内に細長い石像が立ち，その傍の凹みのある石像が並んで祭られているのが目に入った。聞くとバリ島はヒンズー教の本場とも言うべき処であり同教の本尊として男性と女性の「象徴」がならび飾られているのだとのことであった。

バツブランではバロン・クリスダンスを観劇した。

バリ島では色んな種類のダンスがある様子でダンスと一口に言っても舞踊と演劇とを一緒にした様式のもの，欧米の歌劇ーオペラーに相当するようなものが殆どのように見受けられた。

バロン・クリスダンスはバリ島での色んな種類の中，最も基本的というか初歩的というか伝統的というか…の1つと言われ，善玉と悪玉が必ず存在し，どちらかが勝って一方を滅ぼすという式のものではなく両方の闘いが果てしなく続くという，何か結末のない，ややこしいものであると誰かが述べていた。伴奏はガムランという当地方独特の楽器を使用，賑やかで，物悲しい響きのものであり約1時間半程で終わったと思う。

次いで我々はチュルク，マス，タンパクシリンを北方に駆け抜け有名なキンタマーニ高原へ向かい同所で昼食となった。

何が有名なのか。名前も特異であるが，こ

の高原での眺望が絶景ということで有名らしい。バツール山という富士山によく似た山が聳え，その足下にバツール湖が満々と水をたたえているのだ。拍子がよければバツール山の向こうにアバン山，聖峰と呼ばれるアグン山が見えることもあるという。この高原は千5百m以上あり昼なお涼しく感じられた。

ここでの昼食は中華風であり道端には屋台も見られたが，子供らの物売りが相当にしつこく皮製品とか，金属製品などを売りつけるのに懸命だったのが記憶に残っている。

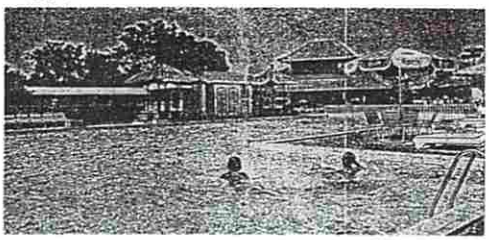
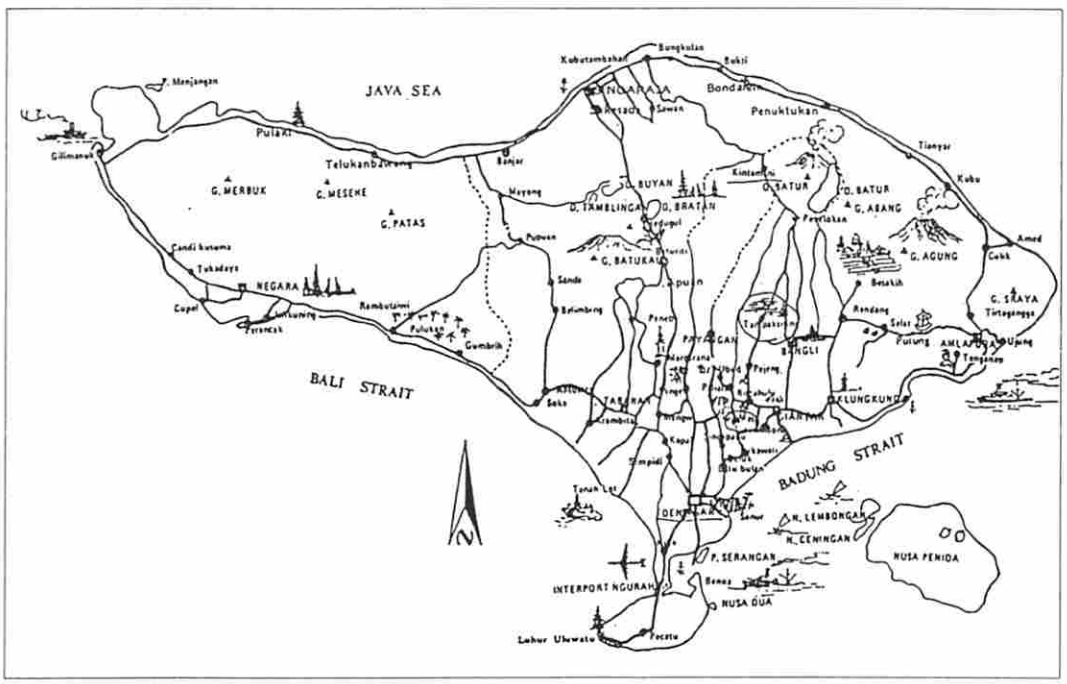
私達の今日の宿泊は昨夜のバリ・ソルホテルが変更になりジンバラン・ビーチ・クラブという日系人経営のホテルに変更になっていたが，第3図の道路に見られるようにバリ島は四通八達，余りにも観光地化されているような印象が強烈ではあったが，半面，芸能の町とも言われ金銀細工や絵画など，秀れたものの多いことでも知られている。バリダンスもその1つの表れとも言えるわけである。同島住民は本来は農耕を主体としているとのことで帰路，南下の途次，中流とされる1軒の民家に案内されたが，一応3世代同居，家族の住まい，炊事場，物置き，作業室，お客さんとの接遇室などがそれぞれに別棟として建てられて居るのには恐れ入った次第である。

ジンバラン・ビーチ・クラブは別図写真のように2階建てのバンガロ型式，各階2組の宿泊室を備え，プール設備もあり，近くには国際的なサーファ達にもよく知られているクタ海岸を控えているとか。

私達は別図写真の手前のプールサイドで夕食を摂ったが，直ぐ先に見えるプールサイドで行われるバリダンスを眺めながらの食事は一味違ったものであった。

明朝は5時にモーニング・コール，5時半ホテル出発，空港へ向かい7時5分ウジュン・パンダンを訪れる予定である。（続く）

別図



第3図　バリ島略図